

「どんぐりの背比べから、頭一つ抜け出す。確固たるシェアを取っていく」

土壌汚染対策として主流の掘削除去（汚染土壌を掘削・搬出して処理）ではなく、原位置浄化（掘削せずにその場で薬剤注入して処理）にこだわってきたアイ・エス・ソリューション（ISS）の西村実社長は、こう明るい将来展望を描く。

工場跡地の再開発などに伴い土壌汚染などが明らかになると、その土地の資産価値は劣化し、土地売買にも支障をきたす。所有者・使用者にとって汚染土壌の原状回復が不可欠だ。

折しも、2003年2月に土壌汚染対策法が施行され、汚染の恐れがある土地の土壌調査、汚染土壌に関する情報公開、浄化措置の実施などが法制化された。

これを機に新市場が誕生し、多くの業界から約1600社が一斉に参入した。03年1月設立の同社もその一つだが、「大企業を中心に8割が『掘って捨てる』掘削除去を選んだ。いずれ価格のたたき合いになり、淘汰が始まる」と読んだ西村社長は「その次の技術で勝負する」ことを決断、\*原位置浄化の先駆け、となる道を選択した。

土壌汚染対策の先進国、米国でも掘



工場跡地の土壌を化学酸化によって浄化する作業の様子

削除去から原位置浄化にシフトしていることも強気にさせた。決意のほどは原位置を意味する「イン シチュ」が入った英文社名「イン シチュ ソリューション」で分かる。社名で原位置浄化に特化することを宣言したのだ。

しかし、道のりは険しかった。実績を重視する環境ビジネスにあって、同社の知名度はゼロに等しく、「設立当初の1年間は全く仕事がなかった」。

「原位置浄化ならISS」の知名度を上げる機会は1年後に訪れた。原位置

浄化を手がける他社が工場の浄化に井戸注入工法で乗り出したが、薬剤注入がうまくいかなかった。そのときISSに白羽の矢が立った。提携先の米ERFSが開発し、ISSが日本での独占使用権を持つプロパゲーション工法で採んだところ、薬剤が汚染土壌に入り込み、浄化に成功した。

ただ、工場の浄化は大規模がゆえに大企業との競争になり、勝ち目がないと判断。攻める市場を、閉鎖・跡地利用の際に自主的な土壌浄化が始まった

#### 【会社概要】

- ▷本社＝東京都千代田区神田須田町2の3の16  
千代田パリオビル6階
- ▷資本金＝4000万円 ▷売上高＝5億3000万円(2009年3月期)
- ▷従業員＝19人（役員4人含む）
- ▷事業内容＝土壌汚染改良に関する調査・研究・開発・企画立案、コンサルティングの受託。土壌汚染改良工事の設計・施工・監理

にしむら・みのる 大阪大学工学部卒。1981年ライオン入社、90年日本総合研究所上席主任研究員（現任）、2001年エンバイオテック・ラボラトリーズ常務（08年から社長）、03年アイ・エス・ソリューション取締役、05年社長。50歳。石川県出身。



## 原位置浄化で一步抜けた存在

ガソリンスタンドに絞った。「大手があまり狙わず、ISSにとって手に負えるサイズ」に注力した戦略が奏功。「土壌がきれいになった」とのロコミが広がり、仕事が増えていった。

こうして実績を積みながら原位置浄化のメニューをそろえ、ノウハウをためた。西村社長は「原位置浄化は\*技術障壁、があり、簡単には参入できない。一步抜けた存在になれば、もっと強くなれる」と次の展開を思い描く。

（松岡健夫）